

タイトル： 面白かった『麒麟が来る』

終わってしまいましたねえ。

筋書はまったく新しい清々しいものでした。

これまでと随分違うと思われた方も多いと思います。しかし、従来の本能寺史観こそが秀吉の「嘘話」を妄信してきた日本史が悪いのであって、そりゃあ勝者が書いた物語ばかりをつづれば偽りの轍死になるのはあたりまえです。

私自身には、また別の本能寺説がありますが、この脚本家はすばらしいと思います。聞けば、NHK大河ドラマは「太平記」足利尊氏の苦悩を見事に描いたあの名作（私は大河ドラマの一番に据えています）の脚本家だということで大いに納得です。

ところで、ストーリーは別にして、この作品では信長と光秀を等身大に描き、かつ二人によく「対話」させました。そのセリフのやりとりが重厚で、深い意味があり深層心理劇になっていました。そうだ、ここまで深く関わり合わないと愛憎入り乱れた本能寺は起こりえない、そう思わせる対話劇でした。その迫力あるセリフや演技を、長谷川さんと染谷さんが実に驚嘆すべき見事さで演じ切りましたね。私は目では見えませんが、セリフの声の演技ですっかり魅せられました。こんなに等身大の見事な信長もかつて見たことがないです。長谷川さんは巧者なのは当然ですが、秀吉も正親町帝（おおぎまち）も上手でしたねえ。勿論、ネット上で大評判になった帰蝶の堂々とした凄み、足利義昭も凡人が僧になり、将軍になり、市井の人になりと、セリフの色変わりがうまかった。いやぁ大変感心したし、意外にもネットではこのストーリーに感銘する人が多く驚きました。嬉しい驚きです。

明智家の末裔、明智慶三郎氏も、長年の無念を晴らしたところでしょう。

光秀恨み説の稲葉一鉄と斎藤利三（としみつ）のトラブル説も、武田勝頼を倒した甲斐での信長暴力説など、まるで子供のいじめ問題のような愚劣な伝承を、ドラマではあっさり無視した所もさすがの内容でした。

光秀が死んでいなかった？という謎のエンディングは、かなり意味があります。

面白い話があります、余談です。

以下は私が10年くらい前に、自分のブログに書いた部分の編集転載です。

本能寺の変で真の首謀者ではないか、とさえ言われている斎藤利三（としみつ）は行方を眩ました後、浄土真宗の轍死で有名な琵琶湖の坂本城の隣村、堅田（かただ）で捕縛され京都の四条川原で刑に処せられた。私はこの堅田村で捕まったことに重要な意味がある、と考えているがここでは省略する。

利三の娘お福（のち春日局）は罪科を逃れ、時を超えて江戸幕府（家康）に召し上げられる。お福の使命は二代将軍徳川秀忠の長男の乳母（めのと）になることであった。一応は一般公募であったらしいが、お福が名指しで選ばれた。

実は斎藤利三の妻は、あの稲葉一鉄の娘。一鉄は美濃の斎藤道三の美濃三人衆の一人、重鎮である。それゆえお福は、罪人の娘でありながら稲葉一鉄の孫娘でもあった。VIPである。

お福は逃れていた四国から実家に戻った、と言える。そして、そこから稲葉系統の家臣、稲葉正成の妻となる。一種のロンダリングのようである。

が、これに終わらない。稲葉正成は何と秀吉の妻方の甥、後の小早川秀秋の首席家老となる。この正成の強い上申により、秀秋は関ヶ原で西軍を裏切るわけで、家康の勝利はお福の夫のお陰と言っていいわけだ。家光の乳母に引き立てることに齟齬はない。

さて、家康に稲葉正成の妻お福の素性を紹介したのは「南光坊（なんこうぼう）天海」という天台宗の僧であった。徳川幕府を裏で糸を引いたと言われ「黒衣の宰相」と呼ばれたこの僧は、きわめて不思議な人物である。

天海は明智光秀その人だ（年齢はほぼ同じ）という説まである位だが、ここでは完全な同一人物説にのめりこまずに不思議な符合だけを見ておこう。

南光坊天海は家康の関ヶ原戦のころから史上に現れる。

天台僧だが過去は秘密のベールに包まれて登場した。初対面の日、家康と天海は人払いをして長く話し込んだという。（筆者…家康とは旧知の関係だったのか）

天海は比叡山で修行したというが、徳川家は本来浄土宗を菩提寺としている。どうして天台僧の天海を圧倒的に近づけたのか？その大きな動機がない。（筆者…家康は天海の何を高く買ったのか）

天海は死後、朝廷から慈眼大師（じげんだいし）の号を授かっている。大師とは「天皇の教師」という意味も持つ重要な称号で、平安時代以降何百年もの間、大師号は誰にも授けられていない。

史上、二人しかいないのである。高野山を築いた空海弘法大師、比叡山を開いた最澄伝教大師だけである。ちょっとではなく、かなり格が違いすぎる。

それが江戸時代、天海に唐突に与えられた。（筆者…天海は、朝廷から異常なまでに感謝されていた男なのだろうか）

斉藤利三の子孫を大切に扱うように指示を出していたのは当然朝廷である。天海が家康にお福を紹介したのも、お福が幕府に上がることで離縁した夫やお福の子が江戸幕府に丁重に召抱えられたことも、みな朝廷の意思であったろう。それを天海が実現した。（筆者…朝廷⇒明智家⇒天海⇒家康は確かにあるルートだ）

天海が春日局に初めて会った時、お福は「お久しゅうございます」と言ったとか…。これは真実かどうかわからないが、わざわざ言い伝わっているところがおかしい。（筆者…お福は天海を知っていた？なぜ…どこで知り合った？）

天海には、武士の頃に使ったと言われる鎧兜が残っている。（筆者…え～？？？天海は昔武士だったのか？比叡山で修行する前？時代的には信長の時代、どこの武将だったの？）

今回ネットの衆が言い募るに、その天海の昔の鎧兜には三日月の大きなマークがついているらしい。そしてドラマの中で光秀が座敷で苦悩する背後には、三日月が描かれた掛け軸がさりげなく配置されていた、と言うのである。みんな良く知っている！よく見ている！驚き！

天海の称号は「慈眼大師」で、日光東照宮の「慈眼堂」は天海を奉っている。この「慈眼」だが、実は光秀の所領だった丹波の亀山城近くには「光秀が建てた」という。何とその名も「慈眼寺」という寺がある。(筆者…慈眼？光秀が先に寺の名前に使ってる。同じじゃないか！なぜ？？丹波なは都の裏、朝廷も知っていたはずの名前だ…)

丹波には朝廷の土地もあり、丹波平定の後、光秀は自主的にそれらを朝廷に変換している。天海の墓は日光だけでなく、信長に焼かれた比叡山の復興に尽力した縁で琵琶湖南西岸の坂本城のそばにもある。ところが坂本城は明智光秀の居城。妻子もここで亡くなっている。(筆者…比叡山の復興に尽力したからといってどうして明智領に？光秀の妻子のそばに？？天海が???)

その天海の墓の隣には、わざわざ家康の供養塔(東照大権現供養塔)もあるという。(筆者…なぜ？家康も坂本に…?)

日光の華嚴の滝が見える美しい丘は昔「明地平」(あけちだいら)と呼ばれていたが、天海がそれを聞いて「なんと懐かしい響きであることか」と言い「明智平」と変えさせた…という逸話が残っている。(筆者…なぜ字まで変えた?)

日光東照宮は家康の死後、天海が建てているのだが、陽明門に立つ武士(木造)の袴の桔梗紋、鐘楼や太鼓楼の桔梗紋、屋根の裏側にたくさんの桔梗紋があるという。日光東照宮のそこかしこにある明智家の家紋、桔梗の紋。(筆者…なぜ明智家の紋が沢山東照宮にある？え？やはり「見ざる言わざる聞かざる」の三猿はそういうこと？詮索するな！ってことなのか…)

徳川家光の後継者の名前は家綱、綱吉と「綱」の字が入るが、徳川家は松平家から数えても綱の字は当主に使われていない。ところが明智光秀の父親は「光綱」と言った。家光の「光」が誰の「光」なのかはわからないが「家綱」と続けると斉藤道三に仕えて滅亡した光秀の父「光綱」となる。江戸幕府に光綱が復活することになる。(筆者…奇遇か酔狂かな)この名付け親は天海である。そういえば天海は南光坊という。南は南無の南だから、光はかなり重要だ。天海は名前に「光」の字を使っている。

と、天海が光秀当人でなかったにせよ、天海という人物が朝廷、比叡山、明智家と密接なつながりがあったこと、少なくとも高貴な位であったこと、重要人物であったことは間違いない。このミステリーはなかなか面白い。チンギス・カンが源義経だった、などという荒唐無稽さとはずいぶん趣を異にする話である。

1616年大坂冬の陣が終わって間もない頃、比叡山に「願主光秀」という灯籠が寄進されている。そう刻まれているだけで寄進者ははっきりしない。何を願ったのかもわかっていない。光秀生存説を掲げるひとつの傍証である。ちなみにこの翌年、家康は逝っている。

天海はなぜか、自身の持つ朝廷と太いパイプによって、以後徳川家で朝廷がそんざいに扱われず面目を保っていけるように尽力した。朝廷を平和の象徴的存在としたのである。

琵琶湖渡りで有名な明智左馬之助は、坂本城に火を放って死んだ。ことになっているが、この左馬助の子孫が土佐の長宗我部氏を頼んで移住したという。姓を坂本城にちなんで坂本と変えたが、家紋はそのまま桔梗を使っていた。

やがて土佐は山内家のものとなるが、坂本氏は延々と永らえて幕末にひとりの青年を世に出す。それが桔梗紋を羽織った坂本竜馬である。

竜馬は無邪気にもアメリカの政治を横井小楠（しょうなん）から学び、民主主義によって「国王」を選ぶ？大統領制に魅せられてしまう。そして、日本の将来から天皇家を一般市民にお戻し奉り、完全なる民主国家にしようと夢を抱くのである。そして実際それを回天成った薩摩の首脳に提案するつもりだった。

しかし、竜馬のこの過激すぎる先進性は、師の横井小楠でさえ「竜馬は危険すぎる」と言った理由はそこにあった。

竜馬のアイデアは反朝廷だったわけではない。朝廷がある限り、自分たちがやっているように誰かが政治に利用する。

利用される朝廷がある限り、国内の政争は無くならない。無くならない内は世界と対峙してやっていけない。世界の一流国となって貿易を盛んにしていくには安定した国家体制が必要だ。だからこそ、帝にはご隠居いただく。昭和、平成の象徴天皇制よりさらに先を進んでいた。

朝廷の権威を救った明智光秀、朝廷を戦わない象徴天皇制にした天海、朝廷をその権威の鎧から解き放とうとした坂本竜馬。いずれも明智の桔梗紋でつながっていると思うと不思議だ。

誰かが朝廷を利用する、その恐れは昭和になって現実化した。

令和のこれからもずっとそういう輩は出るだろう。

多くの人間の歩みの積み重ねの上に我々は生きているが、正しい真実を見る眼は穏やかな心にしか宿らない。

以上です。

長かったですね、失礼しました。いかがでしたか？

つ・づ・く

余談

ちなみに、本能寺のあとさきで胸をなでおろした方は、帝です。帝の心は、数千年にもわたって常に異国人、異国の宗教に嫌悪を示しました。秀吉はバテレン追放を朝廷に約束して、関白の地位を手に入れました。優れていたのは家康で、幕府を開いたあと世界の勢力図が、スペイン・ポルトガルからオランダや英国に代りつつあることを認識していたことでしょう。宗教に関係なく、八重洲口の名前にもなった「ヤン・ヨースチン」や「三浦按針」といった外国人を傍に置いたことです。カトリックからプロテスタントの時代をしっかりと捉えていました。が、彼の子孫は盲目的に異教徒を迫害し、幕末まで踏み絵（実際は 絵踏み という）を行いました。

本多伸芳 筆責